

## WA!



No.9

手を合わすご縁

「お仏壇って何か恐いですね…」  
あるお参り先での若い奥さんの言葉である。

この女性は都会から、田舎へと嫁いでこられ、小さい時はお仏壇がない家庭で育ったということだった。田舎での生活で、ほぼ初めて目の当たりにするお仏壇は、夜に側を通るのも「怖い」という印象だったようだ。都会では、お仏壇のない家庭があることはよく聞かすが、この安芸の地でも、核家族化に伴い、そのような家庭が当たり前のように存在している。その中で育った子どもがお仏壇に対して冒頭のような印象を抱くのも無理のないことかもしれない。

また、他方で、「東京にいる息子が里帰りすると、必ずお仏壇に手を合わせてくれる」と、嬉しそうに話をしてくださった方がいた。その息子さんは小さい時から親がお仏壇に合掌する姿を真似て、一緒に手を合わせていたのかもしれない。日常の中に自然と手を合わせることでできる場があるというのは大切なことであろう。

しかし、最も大切なのは家にお仏壇があるかないかではなく、1人の子どもが幼少期を過ごす中で、たとえ1回でも2回でも、仏様に向き合い、その御心に触れるご縁があったかどうかであると思う。

今、宗門でキッズサンガという取り組みが展開されている。これは全ての寺院において、子どもを対象とした何らかの行事を行っていくとするものである。その実現のためには、1人でも多くの子どもが仏様に手を合わすことのできる環境を作っていくことが必要である。もちろん、地域によって様々な制約や実情もあるかもしれない。しかし、小さな一歩を踏み出すことによって、もしかしたら幼少期に手を合わすことすらなかったかもしれない子ども達に、手を合わせることでできる場が開かれていくなれば、それは間違いなく大きな一歩となるはずである。

## 指導者学習会

六月八日（月）平成二十一年度の指導者学習会が、清胤祐子さん（山県太田組・正覚寺坊守）を講師に、広島別院にて開催されました。



清胤祐子先生

## あなたにあえたから

## ○ 仏の子をあずかる

夫から「子どもをつくるでもない、授かるでもない。あずかるんだよ。仏さまからあずかったんだよ」と聞かされ、

責任の重さを感じて、とても緊張されたそうです。そして、先生は三人の子の母親となり、そのお一人、ご長男についてこのようなお話しをいただきました。

長男は高校入学から広島市内の祖母宅で下宿生活をしている。バレー部に入学し、レフト・エースアタッカーである。

高校三年となり、インターハイ広島県の地区予選、対戦相手は、強豪シード校のJ高校だった。この対戦相手に勝てばベスト16となる。そして、J高校とベスト16を争うその試合は、地元加計の体育館で行われる。

試合の前日、三年生のチームメイト八人は、息子の我が家でもあり、試合会場にも近い正覚寺で合宿をすることとなった。チームメイトと息子はうれしそうに輝かしい笑顔で帰ってきた。帰ってくるなり、「帰ってきたぞー！」といわんばかりに大きくひとつ大鐘を撞いた。しばらく離れて下宿生活をしていた息子は、お寺での生活を忘れてしまっていたかと思っていたら、何気ない彼の行動と仕草から「忘れずにいてくれた」と、成長したわが子を見てとても感動した。

ベスト16をかけたゲームは、残念ながら長男にとって高校生最後のゲームとなってしまった。そのゲームには、私をはじめ、応援に駆けつけた家族や親類、友人達が一緒だった。とうとうゲームの終盤となり、「あと一分でいいから、あと一球でいいから、もう少し、もう少し

ゲームをさせてあげてください」と願いに願った。必死にボールに食らいつく息子の顔をみていると、出産の時を思い出した。真っ赤な顔をして元気な産声をあげていた。必死にコートに立つ姿と生まれたばかりの姿が重なって「本当にうれしかった。ようこそお母さんのところに生まれてくれたね」と感慨深く、子育ての大変さの中から仏さまのご苦労と撰取不捨のお心を知らされて、我が子が誇らしく、親にとって「あなたは錦」ですと、思われた。

## ○ 「辛抱」を教えてあげて欲しい

清胤祐子先生といえは、大きな紙芝居で布教されることで有名です。

このたびは『花さき山』（斉藤隆介・作 滝平二郎・絵 岩崎書店）を大きな紙芝居にして、方言で書かれたお話を情感たっぷりに聞かせてくださいました。『花さき山』は次のようなお話です。

「あや」という女の子が、祭りのご馳走にと山菜を採りに山に分け入った。山菜採りに夢中になった「あや」は、山深く入り山姥と出会う。山姥と出会ったそこには、珍しいきれいな花がたくさん咲いていていた。「あや」の足下にひとつ咲いた小さな赤い花、それは「あや」が欲しかった着物を、祭り着を欲しがってぐずる妹のためにゆずって辛抱したから咲いた花ということを手姥が教えてくれた。

山姥は「あや」のやさしい心を知っていた。ここの面に咲く花々は、自分のことより人のために辛抱して咲いた花々であった。無事に帰った「あや」は両親にそのことを話すが信じてもらえなかった。だが、辛抱するたびに、あの山に花が咲くとうれしく思う「あや」だった。

そして、先生のご法話は、次のようなお話でした。

近ごろの若い父親・母親が「辛抱」という言葉をあまり使わないよう、「我慢なさい」「頑張り（我ん張り）なさい」と我を中心とした、自分のためにという言葉を知らず知らずのうちに使っている。

「辛抱」とは相手のためにすることで、そのような言葉を自然に使うことが少ないようである。

お葬式では、アクセサリは控えられるが、洋装では真珠のアクセサリを身につけられることもある。（真珠は涙の宝石とよばれるそうですが）真珠はどのようにしてできるか。それは生きているアコヤ貝の殻を無理矢理こじ開け、身を傷つけられて核となる異物をねじ込まれる。「痛い、痛い」とその異物を出そうとするのだが、出すことができない。

すると今度は異物の核を抱いたまま、丸い珠に育ててゆく。私たち人間はまわりが悪い、世が悪いと排除排斥してゆく。アコヤ貝は異物を抱きしめて育て、自分の澱（おり）を与えてまん丸

の真珠をつくる。考え方、生き方を変えて抱いて育てていく。それは辛抱のたまものである。

お葬式では別離の悲しみの真つ直中にある遺族に対して、「ここぞしんぼうのたまもの」との語呂合わせであるが、真珠のアクセサリーはその遺族の悲しみに寄り添う心を表している。

ここで先生は、映画『おくりびと』の本木雅弘氏と青木新門氏の『納棺夫日記』について、「お金が中心とするあり方」や「生きていく方が素晴らしく、死んだらおしまい」と傾倒した現代人のありように対して、本木氏の感心と『おくりびと』への仏教者青木氏として素晴らしい態度であることに触れられました。

この青木氏の態度については、『納棺夫日記』を読んで感動した本木氏が十数年もの間構想を練り、『おくりびと』として映画化をされるのだが、『納棺夫日記』と『おくりびと』のシナリオでは青木氏が求めている方向性と異なっていたようで、青木氏は映画化の際、原作者として表されることを拒否されます。

青木氏は毎日新聞の取材で次のように答えているようです。『おくりびと』の送られてきたシナリオを見るとね、親を思ったり、家族を思ったり、人間の死の尊厳について描かれているのは、伝わってきて、すばらしいんです。ただ、最後がヒューマニズム、人間中心主義で終わっている。私が強調した宗教とか永遠

が描かれていない。着地点が違うから、では原作という文字をタイトルからはずしてくれて、身を引いたんです」

青木氏は親鸞聖人の教えを仰ぐ仏教者として『納棺夫日記』に表した第三章「ひかりといのち」が描かれていないことに問題であったようです。

現代人の成果主義・死生観の問題を挙げられ、最後に先生は次のように締めくくられ研修会は終わりました。

排除されることはどんなにつらいか。現代の子どもは排除され続けている。そして、「我慢」より「辛抱」を教えるべきであらう。仏の子は親を夢中にさせる力があります。



浅井成海先生

## 中四国ブロック少年 連盟指導者研修会

六月二十二日～二十三日と、山口教区担当にて中四国ブロック少年連盟指導者研修会が開催され、各地より約八十名の方々が参加されました。

一日目は山口別院において浅井成海先生（教学伝道研究センター所長）よりご講義をいただき、二日目は会場を湯田温泉へと移し三宝裕先生（ヒューマン・リレーション・センター代表）より体験学習の講習をいただきました。

浅井先生には「いちいちの華のなかよりは」という講題で、釈尊や親鸞聖人のみおしえを通して、子ども達に「手を合わせる世界」・「いのちの尊さがある世界」をどのように伝えていくのか、また親鸞聖人のお姿を通して、私たち指導者というものはどうあるべきかということをお聞かせいただきました。

そして夜には会場を湯田温泉へと移し、浅井先生ご臨席のもと懇親会が行われました。日頃なかなか顔を合わせて話すことの少ない各教区の方々とも語り合えることができ、楽しい時間を過ごすことができました。

二日目、三宝先生の講義では「コミュニケーション体験学習」をみなさんと行いました。ここでは、数名のチームで話し

し合いをして時間内に一つの答えを出していくという作業や、相手の心をとらえる聞き方を二人一組で行うということを行いました。「コミュニケーションとはお互いの考えや気持ちをはかりあうこと」と三宝先生がおっしゃっていました。これまでの私は「本当のコミュニケーション」がとれていたのだろうかと考えさせられました。

今回初めてこの指導者研修会に参加させていただきましたが、本当に実りの多い貴重な時間でした。参加前には子ども達への接し方や、レクリエーションについてなどの具体的な研修会なのかと思っていました。それが違ふ大切なことを教えていただいたように思います。子どもも私たちも人間です。一人ひとりに個性があり輝きがあり、「こうしなければいけない」とか「こうすれば良い」というものはないのです。けれど、「あなたが大切・わたしが大切」という世界を私たちがまっすぐに心と体で伝えることをすれば、子ども達はきっと感じとってくれ、お念仏に生きることによる喜んでくれることでしょう。それを改めて思い起こさせていただきました。

来年度の学習会は山陰教区で行われるので、今からまた楽しみにしております。ありがとうございます。

（賀茂東組・正覚寺 久保田弘美）

# 気になるスポット探訪。With キッズ！

楽しめる  
遊べる  
学べる

子ども達と、楽しめる、遊べる、学べるスポットを紹介するコーナーです。今回は、東広島市福富町にある道の駅「湖畔の里 福富」と、隣接する豊栄町にある牧場「トムミルクファーム」を紹介します。

## 湖畔の里 福富



「湖畔の里 福富」は東広島初、広島県内では14駅目の「道の駅」として平成20年9月に開業しました。食事は交流館内にレストラン、屋外にはバーベキューをするデイキャンプ場もありますが、芝生広場もありますので芝生の上にシートを広げ、持参したお弁当をみんなで食べるのも楽しいと思います。屋外にあるさまざまな大型遊具で遊んだり、芝生の上でボール遊びなどもできます。また、交流館内にある特産品販売市場では東広島市の特産品や地元農家で採れた新鮮野菜もたくさん並んでいるので、お土産としても喜ばれると思います。

「湖畔の里 福富」は平成21年3月に完成した県営福富ダム湖に囲まれる景観に恵まれた場所に位置しています。福富ダムが建設された沼田川流域は、降雨が梅雨期、台風期に著しく集中し、時おり大きな洪水被害が発生しています。さらに、沿川地域の発展に伴い、洪水被害は増加の傾向にあり、抜本的な治水計画が強く望まれていました。一方、沼田川の水利用は古くから行われ、しばしば深刻な水不足に見舞われており、これからも流域周辺地域の生活活動、宅地化の進展による水道用水の需要の増大が予想され、新たな水資源の確保が緊要になっています。福富ダムは、こうした問題を解決するため建設されました。

### 「湖畔の里 福富」

広島県東広島市福富町久芳1506  
山陽自動車道「西条IC」から  
国道375号を三次方面へ15分  
TEL：082-435-2110  
営業時間 9:30～18:00  
休館日/水曜日



## トムミルクファーム ファーマーズマーケット十夢

道の駅から5分ほど車で走ったところに、おいしいジェラートの食べられる「トムミルクファーム、ファーマーズマーケット十夢」があります。元気な牛から搾った搾りたてミルクをたっぷり使ったジェラートをはじめ、手作リクッキーにふわふわプリン、新商品の口の中でサラッととろけるミルク生キャラメルなどが販売されています。

また、このトムミルクファームでは240頭の乳牛のほかに、やぎ、ぶた、ポニー、ロバたちと広大な牧場で触れ合い、酪農を通して、心の教育、いのちの教育、食の教育を支援することを目的とした牧場体験を実施しています。2名から学年単位の学習旅行、子どもから大人までさまざまな方の牧場体験を受け付けておられるので、家族や子ども会などで体験学習されてもいいと思います。

### 「トムミルクファーム」

広島県東広島市豊栄町乃美1083番地5  
TEL：082-420-3323  
営業時間 10:00～17:30頃  
定休日/火曜日

